

〔亜熱帯における農業技術の普及及び経営指導〕

ミニトマト有望品種の特性把握

～「甘っこ」の普及に向けて～

菊池 豊

(営農研修所)

【要 約】有望品種の「甘っこ」は、従来品種「ネネ」より収量性が高く、食味も同等以上である。特に、裂果の発生が少なく、果実品質や輸送性も優れている。

【目 的】

小笠原では食味の良いミニトマトが収穫されることから、島内消費だけでなく贈答用や土産物としての需要も多く、冬から春にかけての基幹作物となっている。現在、糖度が高く食味が優れる「ネネ」の栽培が行われているが、ここ数年、栽培中や出荷作業時の裂果が多く、輸送性の低さも懸念されるようになった。そこで、2006年度に試作した結果では、糖度が高く裂果の少なかった「甘っこ」を「ネネ」と比較することにより、「甘っこ」の品種特性を明らかにし、生産者への普及に資する。

【方 法】

供試品種である「甘っこ（丸種種苗）、ネネ（日本園芸生産研究所）」は2007年9月21日に播種し、10月11日に鉢上げを行った。定植は11月5日に行い、ベッド幅140cmの2条植えとし、樹勢の違いを考慮して株間は「甘っこ」50cm、「ネネ」45cmとした。施肥は基肥を成分量でN-P₂O₅-K₂Oを2-1.2-0.4kg/a、追肥を窒素成分量で0.5kg/aを月に1回施用し、ホルモン処理は着果の安定を図るため、トマトトーンの100倍液を「甘っこ」のみ適宜散布した。調査は1区あたり「甘っこ」16株、「ネネ」18株の2反復とした。

【成果の概要】

- 1) 総収量、上物率ともに「甘っこ」が上回った。「ネネ」は上物果率が低かったが、その原因は裂果によるものがほとんどであった(表1)。
- 2) 収穫初期にあたる12月の糖度は「ネネ」が上回った。しかし、1月以降は「甘っこ」が上回り、特に3月からの糖度は10Brix%を越える高い値で推移した(図1)。
- 3) サイズは「甘っこ」はL級、「ネネ」はM級が最も多く、その占める割合はほぼ50%であった。また、S級は「甘っこ」は5%と少なかったが、「ネネ」では20%を占めていた(図3)。
- 4) 収量は12月は「ネネ」が、1月以降は「甘っこ」が上回った。「甘っこ」は2月以降の収量も安定しており、収穫終期の5月も収量は落ちなかった(図4)。
- 5) 食味等の調査結果は味、食感、外観とも「甘っこ」が優れるとの意見が多かった。また、購入したい品種も「甘っこ」が「ネネ」を上回った(表2)。
- 6) 外観は「甘っこ」の果色は濃鮮赤、ガクが濃緑、「ネネ」の果色は鮮赤、ガクが緑で「甘っこ」の方が見栄えが良かった(図2)。また、本土への輸送中に問題となる品質低下を調査したところ、「甘っこ」は裂果やガクの萎れが少ない傾向が確認された(データ省略)。
- 7) 以上から、「甘っこ」は収量性、食味、果実品質、輸送性が優れる品種と判断したため、島内成果発表会等で生産者への普及を図った。その結果母島での、2007年度産ミニトマトの作付け本数は「ネネ」のみ1300本であったが、2008年度の作付け本数は「ネネ」1300本に「甘っこ」1300本が加わり、ミニトマト全体の作付け本数が倍増した。

表1 ミニトマト「甘っこ、ネネ」収量(1aあたり)

品種	総収量 (kg)	上物果		上物果率 (%)	1果重 (g)	下物果の内訳(%)		
		個数(個)	重量(kg)			裂果	キズ	その他
甘っこ	887	59400	838	94.5	14.1	77.2	18.3	4.5
ネネ	767	51540	609	79.4	11.8	99.4	5.1	0.5

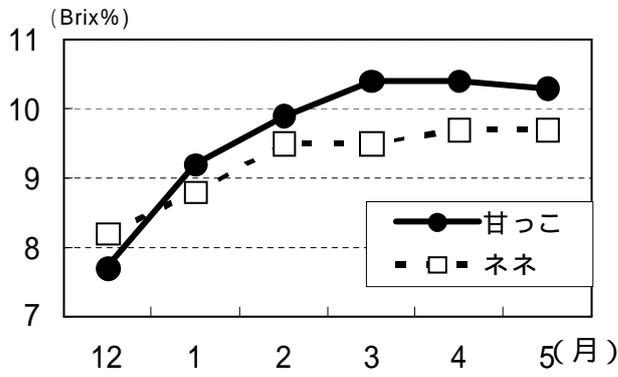


図1 糖度の推移

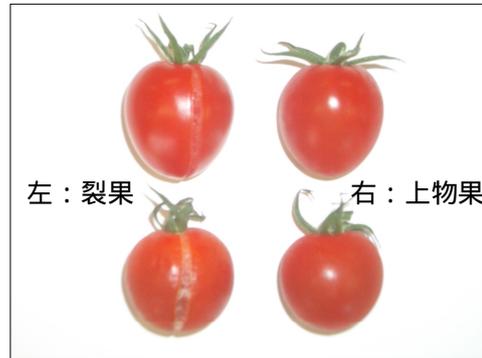


図2 外観(上:「甘っこ」、下:「ネネ」)

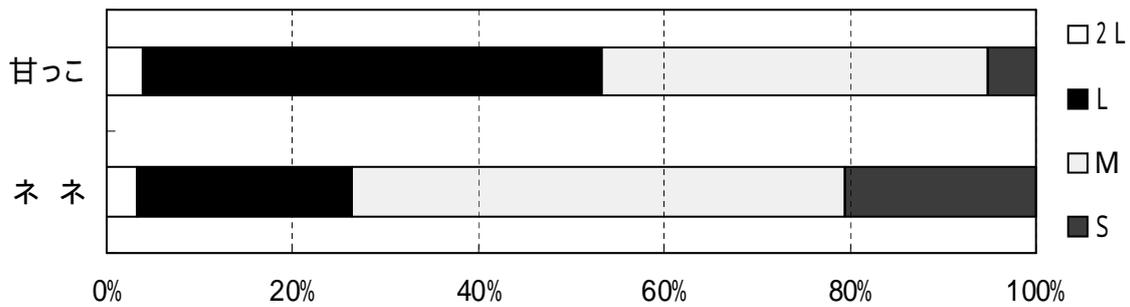


図3 サイズ別上物果収量構成割合(2L:20g以上, L:15~20g, M:10~15g, S:5~10g)

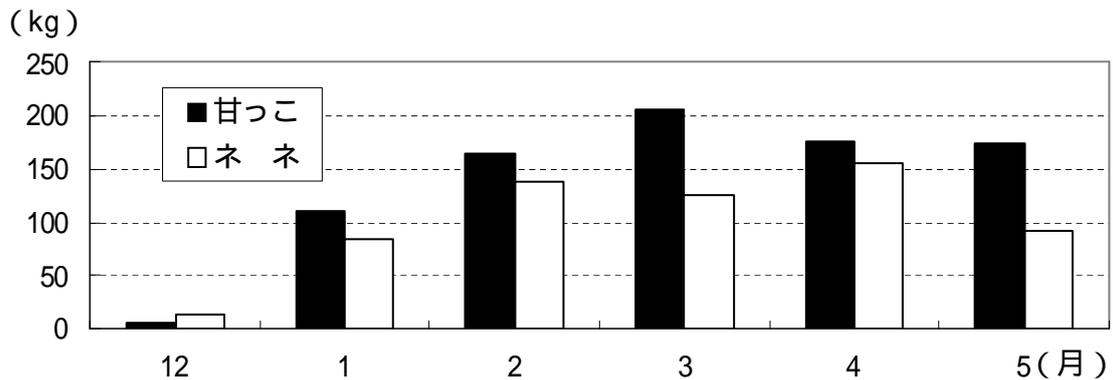


図4 月別上物果収量(1aあたり)

表2 「ネネ」に比較した「甘っこ」の評価^{a)}

評価	味(%)	食感(%)	外観(%)	評価	購入希望(%)
良い	70	46	75	甘っこ	42
同じ	15	40	20	両方	39
悪い	15	11	5	ネネ	19

^{a)} 評価は2008年3月22日に実施。回答者数は81人でその内訳は島民51人、観光客17人、その他13人。